
「アレルギー性疾患 —最近の話題—」

巻 頭 言

京都府立医科大学大学院医学研究科
皮膚科学

加 藤 則 人

25年前の大学の講義では、アレルギーの概念として Coombs and Gell の I 型から IV 型の分類と、I 型アレルギーにはアレルゲン、IgE、肥満細胞・好塩基球が必須であることを学んだ。ところが大学を卒業して自分で実験をしてみると、アレルゲンがなくても IgE を介するアレルギー炎症が誘導される現象が再現性を持って観察され、アレルギーは Coombs and Gell の概念で説明できない複雑で多様な病態から構成されていることが予感された。

その後のアレルギー領域の研究の進展はめざましい。生体には抗原特異的な反応以前に病原体に対して早期に誘導される免疫反応が備わっていることや、生体防御反応である炎症反応においては活性化の反応と共に免疫反応を負の方向に制御するさまざまな反応が同時に誘導されることなど、新たな概念が次々に生まれていき、それらがアレルギー性疾患の病態をより深く理解することに役だっているばかりでなく、新たな治療法の開発に結びついている。

私が対象にしている皮膚においても、皮膚は単なる体の表面をおおう臓器ではなく、生体防御の最前線において多種多様な自然免疫反応を起こすことや、喘息やアレルギー性鼻炎、食物アレルギーなどさまざまなアレルギー疾患の感

作は皮膚を介して成立することなど、この数年に明らかになった事実はこれまでの皮膚に対する考え方、さらにはアレルギー疾患に対する概念を大きく変えるものであった。

今回は、アレルギー性疾患 —最近の話題— というこで、国立環境研究所環境健康研究領域の高野裕久先生には環境汚染とアレルギーや化学物質過敏症との関係、本学耳鼻咽喉科・頭頸部外科学の安田 誠先生にはアレルギー性鼻炎の最新の治療法、本学皮膚科学の益田浩司先生にはアトピー性皮膚炎や接触皮膚炎、蕁麻疹などのアレルギー性皮膚疾患、本学呼吸器内科学の上田幹雄先生には炎症性疾患としての喘息とその検査・治療・管理法、そして本学小児発達医学の土屋邦彦先生には正しい診断と耐性獲得を目指した食事指導など食物アレルギーの診療と、アレルギーの分野でご活躍中の先生方に、それぞれが専門とする領域に関する最新のトピックスを中心に解説していただいた。免疫・アレルギー学の発展に伴い、アレルギー疾患の治療は“Try and Error”の時代から、病態の研究から新たな治療法が生み出されていくようになった。本特集が、アレルギー疾患の診療に新たな息吹を吹き込み、疾患に悩む患者にも未来への夢を与えるものと確信している。